

美濃陶磁歴史館だより

展示や講座、発掘調査の成果、文化財関係事業のお知らせ



織部焼の文様：傘と鶴

ワークショップ 「土岐らしいミュージアムって、 どんなところ？」

土岐市では現在、美濃陶磁歴史館の老朽化に伴い、新しい博物館をつくる計画を進めています。どのような博物館にしたいのか、市民のみなさんと一緒に考え、アイデアを出し合う場としてワークショップを6月18日に開催しました。また、ワークショップに先立ち、美濃陶磁歴史館の現状を見学するバックヤードツアーを6月11日に行いました。参加者のみなさんからいただいた多くの素晴らしいアイデアを活用しながら今後の計画を進めていく予定です。

ワーク ショップ の様子



どんな博物館にしたいのか、
参加者の皆さんにふせんに
書いていただきました！



あまりの量にびっくり！



バックヤードツアー
収蔵庫の見学

開催中

企画展

中上 良子

陶磁器デザイナー
エマイユ作家として

Yoshiko Nakagami

Designer de la CÉRAMIQUE / Artisane de l'ÉMAIL



中上良子 『美濃グルッペ泥人』(1974)より転載

戦後、美濃で女性陶磁器デザイナーの先駆けとして活躍した中上良子（なかがみよしこ）、初の回顧展。陶磁器デザイナーとして、エマイユ（七宝）作家としての軌跡をたどる。

2022 **8.13** SAT → **11.13** SUN



エマイユ額 中上良子 昭和55年(1980)頃



銅版コーヒー碗皿
知山陶苑（銅版デザイン：中上良子）
昭和40年(1965)

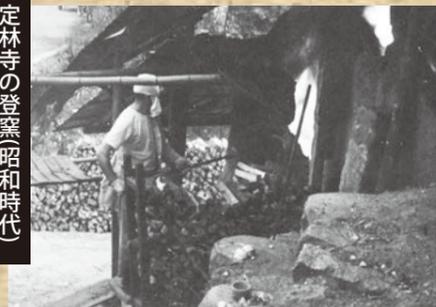


エマイユ壁掛け
中上良子
昭和44年(1969)頃



七宝花瓶 安藤七宝店
（デザイン：中上良子）
昭和39年(1964)

定林寺の登窯(昭和時代)



昔の写真を 集めています

美濃陶磁歴史館では、陶磁器資料以外に昔の写真も収集しています。収集した資料は建設予定の新しい博物館などで活用していきたいと思えます。古い写真をお持ちの方は、ぜひ美濃陶磁歴史館までご連絡ください。

土岐市駅前の陶器祭り(昭和時代)



駄知の花馬(昭和時代)



下右の新車のバイク(昭和時代)



SNS
更新中



創作の原点

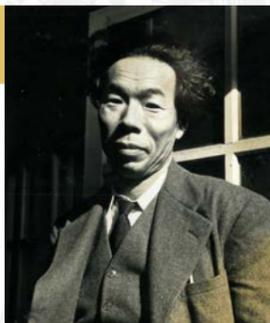


岐阜県高山市出身の良子(1932-2005)は、画家徳永富士子から絵を習った。

高山時代、カンバスに向かう中上良子

昭和 26 年 (1951)

絵が上手だからと、多治見の上絵付専門の製陶所 太洋陶園に入社。窯業指導に訪れていた陶磁器デザイナーの日根野作三と出会う。



日根野作三 昭和 28 年 (1953) 画像提供：三重県立美術館

昭和 37 年 (1962)

安藤七宝店にデザイン提供を行う。絵画的にモチーフを表現する無線七宝「エマイユ」と出会う。



七宝デザイン図案 中上良子 昭和 42 年 (1967)



七宝花瓶 安藤七宝店(デザイン:中上良子) 昭和 42 年 (1967)

昭和 30 年代後半頃

エマイユの制作に着手。自宅でエマイユ教室を主宰。教室の生徒と「エマイユ・シュレ」というグループを結成。



エマイユ壁掛け 中上良子



エマイユ額 中上良子

昭和 30 年 (1955)



知山陶苑へ入社。銅版転写のデザインを一手に担い、陶磁器デザイナーとして評価を得る。

知山陶苑の仕事場

第 4 回輸出陶磁器デザインコンクール 中小企業庁長官賞



銅版皿 知山陶苑 (銅版デザイン:中上良子) 昭和 36 年 (1961)

グッドデザイン賞

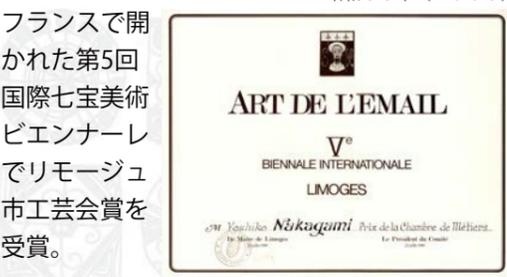


銅版コーヒー碗皿 知山陶苑 (銅版デザイン:中上良子) 昭和 40 年 (1965)

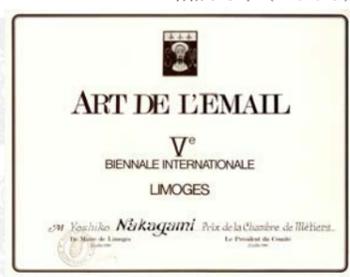
昭和 55 年 (1980)



国際七宝美術展会場にて受賞作と 昭和 55 年 (1980)



フランスで開かれた第5回 国際七宝美術ビエンナーレでリモージュ市工芸会賞を受賞。



国際七宝美術展賞状 昭和 55 年 (1980)

美濃のクラフト 運動

昭和45年(1970)、日根野作三を起点に中上良子をはじめとした美濃の作り手がグループ「美濃グルッペ泥人」を結成。

新収蔵!



大鉢 伊藤慶二 昭和 43 年 (1968) 作家寄贈 土岐市美濃陶磁歴史館



彩雲(皮剥手)茶碗 中島正雄 土岐市美濃陶磁歴史館

予告 次回の企画展

妻木の 2022年 十二月十九日(土) ↓ 2023年 二月二十八日(日) 熊谷吉兵衛 美濃の大陶商 「西浦屋」を支えた人

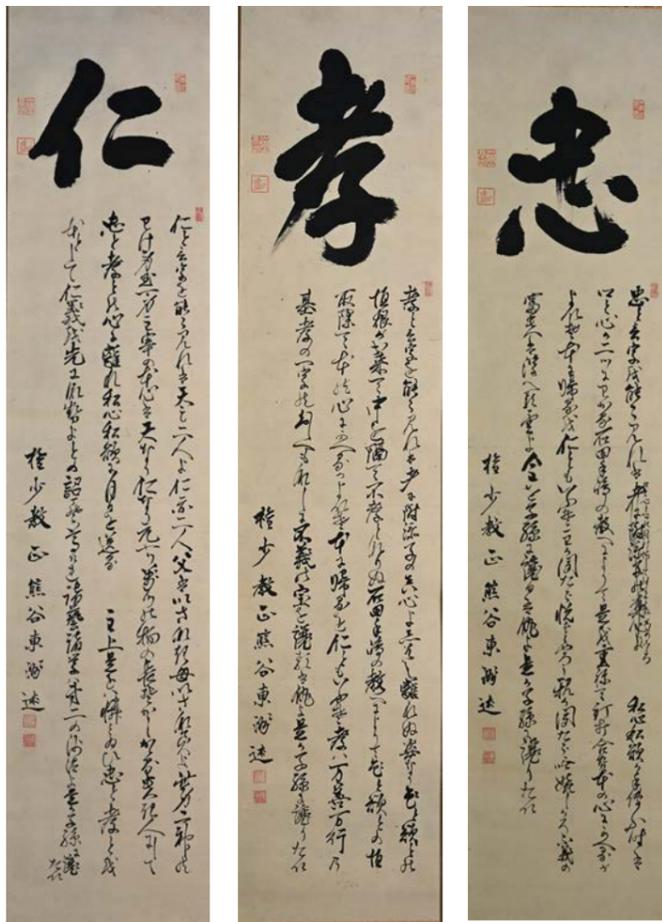
妻木村(現土岐市妻木町)に生まれ、幕末から明治への時代の転換期に多治見の大陶商「西浦屋」の江戸店支配人として活躍した商人熊谷吉兵衛(1814-1890)。その知られざる生涯をたどる展覧会です。吉兵衛は、西浦屋の商売の傍ら江戸で「石門心学」という学問を極め、「参前舎」という心学講舎(学び舎)の舎主を務めるまでになります。石門心学は江戸時代に商人を中心に広まり、後には渋沢栄一や松下幸之助も影響を受けたという学問です。本展では、石門心学を通じた吉兵衛と様々な人々との交流についてご紹介します。



伝 熊谷吉兵衛肖像写真

店を盛り立て、家を守り、世のために尽くす... 石門心学を信条として、幕末から明治への激動の時代を生き抜いた一人の商人と彼にまつわる人々の物語

山岡鉄舟との交流



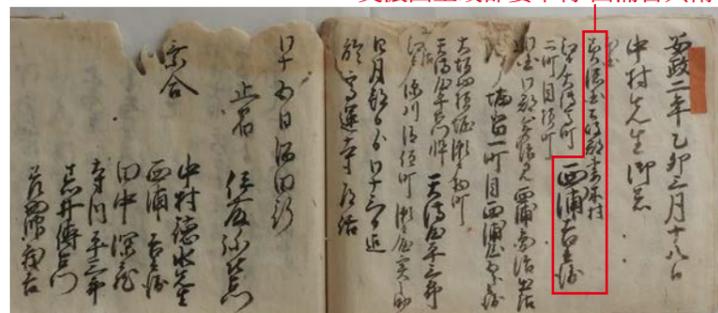
書「忠孝仁」 山岡鉄舟・熊谷東洲 明治時代(19世紀)

「忠孝仁」の題字を剣豪山岡鉄舟が記し、下に吉兵衛(東洲)が石門心学の教えを記したものです。江戸城無血開城の立役者として知られる山岡鉄舟は書や禅の達人としても知られ、明治13年(1880)の明治天皇の東濃巡幸に侍従として随行し、虎渓山永保寺などを訪れています。吉兵衛とは石門心学を通じ、東京で交流があったとみられます。

山形県庄内地方への旅

安政2年、吉兵衛は石門心学の師匠である中村徳水に付いて山形県庄内地方へ赴き、石門心学の教えを広める旅をしました。中村らを招いたのは鶴岡の商人荒井和水でした。荒井和水の日記には「西浦吉兵衛」(西浦屋の吉兵衛のこと)が鶴岡や酒田を廻った様子が記録されています。

美濃国土岐郡妻木村 西浦吉兵衛



荒井和水「心学廻村日記」(パネル展示)安政2年(1855) 鶴岡市郷土資料館蔵

還暦記念の里帰りに

錦絵に吉兵衛の歌を刷り込んだもの。吉兵衛が還暦記念で妻木に里帰った際、土産として配ったものとみられます。洋館のドーム型の尖塔の上に洋装の男性が降ってくるというなんとも不思議な光景ですが、文明開化の東京土産として喜ばれたのでしょう。



錦絵(熊谷東洲歌) 明治7年(1874)

明治時代の西浦屋と東京店

江戸時代に仲買商だった西浦屋は、明治時代に入り陶磁器製造と貿易へと業態を変え、「西浦焼」とよばれる輸出向けの質の高い製品を産み出しました。それに伴い、明治16年(1883)、西浦屋東京支店の経営権は西浦家から吉兵衛の養子・2代吉兵衛(辰之助)へと譲渡されました。

西浦焼上絵ティーセット 明治時代(19世紀) 多治見市教育委員会蔵